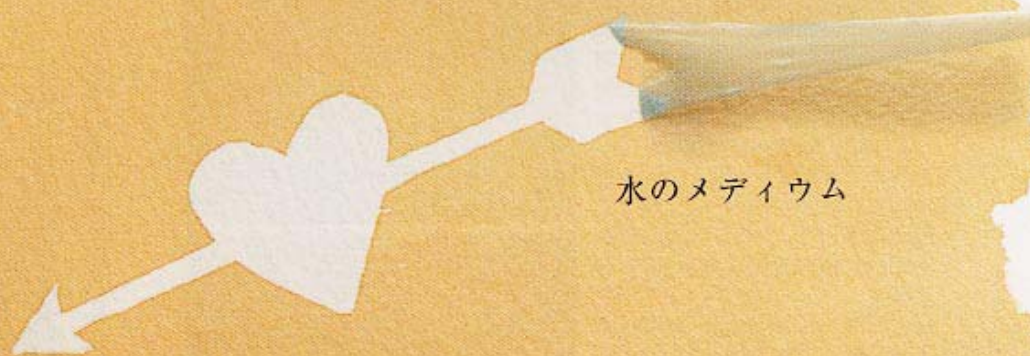


剥がして残す。



水のメディウム

透明水彩での表現を、より个性的にするメディウムがある。それが、マスキングインク。まずこのインクで描き、乾いたあとで描画する。乾燥後インク部分を剥がすとそこだけきれいな白抜きとなって残るのだ。もちろん描画した上に使ってみる手もある。他にも、絵具を自作したり、美しい滲みを作ったり、タッチを変えたり、光沢を与えたり。そういう新しいテクニックが新しい作風を生み、やがて水彩の世界は大きく広がっていこう。お近くの画材店で、手にしてほしい。〈ホルベイン水彩用メディウムシリーズ〉



**holbein**

holbein

## 真島直子

死への恐怖と、生への畏怖と

林洋子 || 文 森田兼次 || 写真\* ||



1980年、コバヤシ画廊での個展では、天井から幅広のガーゼを垂らす展示を試みた。迷路のようにガーゼの幕で仕切られた空間を観客が歩くというもの(ガーゼから透ける人影が作家本人)



1980

「死体を包むガーゼと出会うことで、子ども時代から慣れ親しんだ油彩画、平面から初めて離れることができました」

暗渠の彷徨者たち 1975  
キャンバスに油彩 145×112cm  
(あかね画廊での個展より)

北関東に向かう私鉄に乗り、真島のアトリエに向かった。長年、千駄木に暮らした彼女が10年ほど前に移った場所で、駅から少し歩いた商店街のなかに住まい兼アトリエがあるという。訪ねた先はいわゆるシャッター商店街で、アーケードの奥から真島本人がとんと出てきた。かつて店舗だった1階をアトリエ、2階を居住スペースに当てた「長屋」で、隣の駄菓子屋に集まる近所の子どもたちの声が夕方にはにぎやかだ。真島は終戦の前年、名古屋に生まれている。父・真島建三は戦前、福沢一郎の美術研究所で学んだシュルレアリスム系の画家。子どもの頃から父のアトリエで画材を遊び道具にし、貧乏な「絵描きバカ」が連夜集まる様子に接してきた少女は、成長して美大受験を志す。「美術は世の中を変えられる」と。両親の猛反対に遭い、家出同然で東京に出た。オリンピックで盛り上がる64年、東京芸大油画科に入学したのは、「(実家の環境のせいで)画材についてよく知って



地ごく楽 1990年代後半 オブジェ(1997年以降、個展のたびに鯉の数が増殖していく) 撮影=内田芳孝

## 1993 「小動物ならまるまる呑み込んでしまうというエピソードを聞き、そんな鯉の生命力に惹かれてモチーフとするようになりました」

いたから」という。在学中、学園紛争やベトナム戦争で、世の中がザワザワしていたが、人体中心の授業課題に取り組みながら、「自分の表現をどうするか」という悩みに没入していた。卒業間際にジャン・ティンゲリ、ジャスパー・ジョーンズの講演を聴き、「油絵でなくなつて、なにをやってもいいんだ」と強い刺激を受けた。

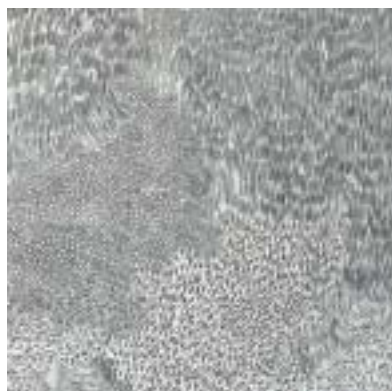
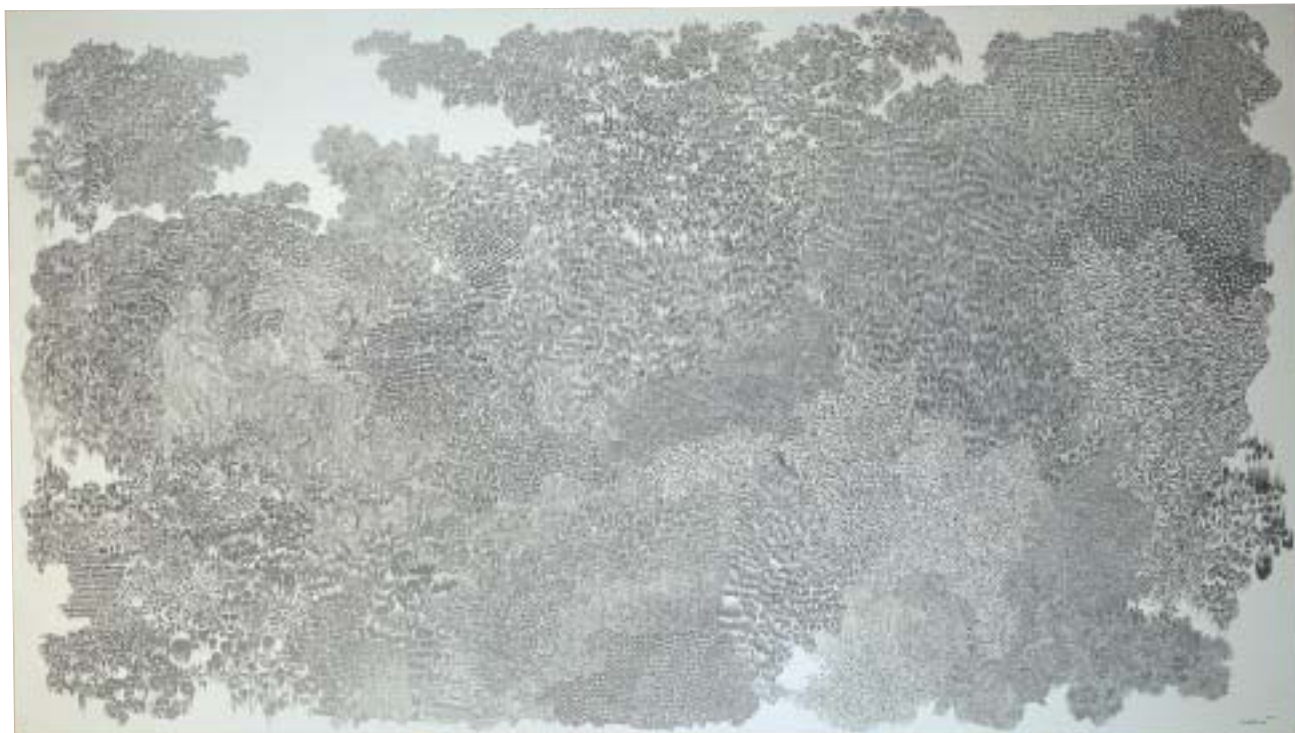
在学中からプロを志向し、あえて教職課程を履修しなかった彼女は、1968年の卒業後、ウインドウ・ディスプレイやヌードモデル、占い師(一)、海外での絵画の買い付けなど多種多様なアルバイトをかけ持ちしながら制作を続けるが、仕事の疲労とそして(学生時代のような)「課題のない自由に戸惑うばかりだった。」芸大調“を捨てるのに、10年ほどの時間が必要でした”。初個展は75年で、もはや人体を描かず、シユール風の油彩画となっていた。

その後毎年1回程度の個展を重ねるが、大きな転機は80年10月のコバヤシ画廊での個展。70年代後半から徐々に「油彩画」に距離を置いてき

ていたが、なかなか「壁のうえの平面」という束縛から離れられずにいた。ここで初めて天井からガーゼを垂らした「インスタレーション」的な展示を試みる。観客が幕で仕切られた空間を歩くという着想は、死体を包むガーゼの存在を知ったことにあつた。医療機関以外では手に入りにくい幅広のものを、八方手を尽くして調達する。ベトナム戦争直後の、テレビや雑誌で「無名の死」の報道が続くなか、真島は時代がまとつた濃厚な死臭を作品化したのである。

死のイメージがいつも作品に色濃くつきまとっていますね、と聞くと、「もともと死をテーマと意識していたわけではないんです」と作家は語つた。幼時に体験した伊勢湾台風とたくさんの溺死体。そうでなくとも当時は子ども死亡率が高く、「子どもの頃に体感していた死や社会への恐怖心が、大人になつても消えなかつたの……」。

その後、ガーゼを染めた展示から、包帯へと展開するが、この時期、彼女はふたつの死に遭遇する。友人



上——地ごく楽2001-1 2001 羊皮紙  
に鉛筆 157.2×270cm バングラディ  
ッシュ・ビエンナーレ・グランプリ受賞作  
下——上作品の部分拡大



鉛筆画の大作を描くために借りた部屋は、  
なんとボーリング場のレーンの床材を再  
利用してある[\*]

## 2002

「バングラディッシュ・ビエンナーレに参加して、  
日本以外のアジアの作家、観客を知る機会になりました」

を介して知り合った寺山修司、そして学生時代からの親友の焼身自殺。友人の死のショックで、「ガーゼを使って制作できなくなつてね」、80年代半ばからの作品は、布に加えて廃材などを利用した床置ききのインスタレーションとなる。

88年、田村画廊で土まんじゅうと血のように赤く染めたガーゼを組み合わせたインスタレーションを発表した際、思いがけない申し出をする男が現れる。長いパリ生活を切り上げて帰国したばかりの工藤哲巳が、「コラボレーションを提案してきたのである。」「それまで工藤さんの作品を正直よく知らなくて、現物を見て、なんてカチカチな”美術”や”社

会”に呪縛を受けた人かと思つたんです」。が、89年と90年に計3回の二人展を実現することになる。制作上、双方向の影響は自然だろう。

その工藤と、父・建三が相次いで亡くなつたのは90年代前半。彼女は再び身近な人の死と直面した。この時期、真島は紙に向かって写経とドローイングをするようになる。生命力の象徴と信じる鯉のイメージもそこが最初だった。「こんなに死をこわがっている人間が、また強烈な死に出合つて、精神的に相当まいつたらしい。この頃から、鯉のモチーフはキツチなオブジェと化していく。並行して描いていたドローイングを初めて公開したのが、93年のヒノギヤラ



まじま・なおこ 1944年愛知生まれ。68年東京芸術大学油画科卒業。個展に75年あかね画廊(東京)、78~80年村松画廊(東京)、79~80年コバヤシ画廊(東京)、82年日仏学院(東京)、91年「ニユルニユルニヨロニヨロ」真木・田村画廊(東京)、93年ヒノギャラリー(95年も)、99~02年ギャラリー川船(東京)、03年武蔵野美術大学αMプロジェクト(東京)、ギャラリークラウド・サミュエル(パリ)、05年ミヅマアートギャラリー(東京)、06年国際芸術センター青森「密林への回廊」ほか。グループ展に88年「万象の変様'88」展(埼玉県立近代美術館)、90年「真島直子と工藤哲巳の花のエロチカ」展(スペース・ニキ、東京)、2001年「第10回アジアアートビエンナーレ バングラディッシュ2001」(オスマニメモリアルホール シルパアラカデミー出品。グランプリ受賞)、03年「おんなのけしき 世界のとどろき」(日仏学院、東京)ほか。現在、「夢のなかの自然——昭和初期のシュルレアリスムから現代の絵画へ」(群馬県立館林美術館、11月26日まで)、「縄文と現代——二つの時代をつなぐ『かたち』と『ころ』」(青森県立美術館、12月10日まで)に出品中。

新興住宅地の真ん中に孤島のように残るアーケード商店街。作家の住宅兼アトリエも元店舗で、隣の駄菓子屋には夕方になると小学生が群れ集まる。昭和にタイムスリップしたような錯覚を覚える[\*]

リーでの個展だった。スケッチブックに描きためていたものを、ギャラリーの勧めもあり、ばらして壁に展示する。水彩やペンなどを併用した「糸虫のからみ合い」種村季弘による(だが、その後、鉛筆のみでの線描となっていく。97年の個展以降、

こうしたオブジェと紙の作品は、「地ごく楽」という、地獄と極楽を併せてもじった造語をタイトルにするこ  
とになる。

真島は、自作を「ドローイング」とは呼ばず、「鉛筆画」という。「鉛筆は静謐な材料なんです」。鉛筆画に取り組む際、絵を描くという意識はなく、「皮膚に刺青を彫りこんでいる気持ち。絵の呪縛から離れられたからこそできる絵なの」。しばしば森、奇景図や内臓の内側、地図、磁場などに例えられるが、まるで羊皮紙が皮膚の表面に密集し、うごめく生命体のようだ。99年頃から彼女の身体サイズを超えた画面は、線の粗密と濃淡により微妙なイリュージョンを獲得するようになった。それを彼女は一種類の鉛筆で描きあげる。紙の種類にもよるが、4Bを使うことが多く、大画面では制作に1か月を要する。この「鉛筆画」のひとつの頂点が、「第10回アジアアートビエンナーレ バングラディッシュ2001」でのグランプリ受賞だろう。「オブジェ」から「鉛筆画」へ、メディアや関係者

の関心が一気に集まった。

現在は、初めて「ひとがた」のオブジェ制作に取り組んでいる来春、横須賀市美術館の開館展に出品予定)。見世物的、チンドン屋的イメージ。「美術の枠でなくてもいいと割り切れたから」。じつのところ、美術館からの展覧会のオファーは、鉛筆画だけで「というものが多いらしい。彼女は自身はオブジェをつくっていないと鉛筆画が描けないという。腱鞘炎になるほどの線描への没入と、卑近な素材を取り混ぜたオブジェ制作は、「合わせ鏡」といえる。メディアは違えども、表面がびっしり「なにか」で覆われている。

万物を引き寄せる不思議な力を真島は持つ。「表面/空間を埋め尽くす」ことには、「死への恐怖」だけでなく、「生への畏怖」があるという。おどろおどろしいだけではない、無限に増殖していく生の力、そこそが真島の作品の最大の魅力なのである。

◎はやし・ようこ(京都造形芸術大学教員  
9月14日、埼玉・越谷の作家アトリエにて取材